

# 現代における福祉問題の焦点

—— 社会福祉に対する根本的な疑問 ——

林 靈 法

(浄土宗大本山百万遍知恩寺法主)

## インドの近代化に学ぶ

私のお話申しあげる題は「現代の社会福祉の焦点」ということでありますが、それは現代日本の社会福祉ということに根本的に疑問をもっていることを申し上げることでもあります。

まずこの問題に私のお話をもって参りますために、少し廻り道をさせていただいて、インドの近代化の事実からお話を申し上げるつもりで参りました。それはインドの近代化と申しますのは、欧米や日本などの高度の先進工業国とは、その過程を異にしている重要な意味をもってありますもので、インドの近代化が今日世界に問うておりますとこ

ろで、実に重要な意義をもち、先進文明国の社会福祉の問題についても、真剣な反省を投げかけているからであります。

私はこの十四年間にすでに十回になりますが、毎回、四十名から六十名の団員にお供して、インドに仏跡巡拝を始め各地の博物館や大学を尋ねていますが、行く度毎にインドの近代化は着々進んでおりますことを注目しております。

近代化ということを西欧的な概念で規定して政治や機械工業の産業化という面からのみ考察すれば、インドでは或は目をみはるということは出来ぬかも知れませんが、例えば、皆さまもご承知のようにベナレスのガンジス河の朝の

沐浴の狂態ぶり、或はブダガヤの大塔附近の雑踏ぶり、或は世界で一番に汚れた大都会のカルカッタの街の混雑ぶりが目に浮びます。そこには道路の上で生まれ成長し、病氣になってやがて死んでいく人々がいつも五十万人も寝ております。あのマザーテレサがその教え子のシスター達と共に、多数の不幸な道路病者をカリイ寺院の一室の「死を待つ人の家」に収容していますが、このようなインドの都会の汚れた混雑や農村のめじめな生活の様子を見て来ますと、果してインドでは近代化が進められているのかと疑わざるを得ないようです。ところがです、インドのヒンドゥイズムは何ともかんと私共西欧化の大きな影響を受けている者からすれば中々に理解しにくいものです。ところが、糞もみそも、そして神も天国も地獄もいっしょくたにしたようなこの混沌たるヒンドゥイズムの生活は、音も声もなく、しらぬ間に近代化の波を呑みほしまして、徐々にではあるが、たしかに近代化の道を進めて行っているのです。

ところで、その近代化と申しますのは、例えば明治百年日本が黄色の肌に白いお化粧をぬって、全く白色先進国へ

の道を突走ったのとは、根本的に違うのであります。一体ここ明治から百年間に日本は米国に次ぐいわゆる先進工業国、経済大国になりりましたが、日本の場合は政治経済とか科学技術といった生活の表面的のものであって、日本人本来の伝統とか歴史とかいったバックボーンの上にそうした科学、学問、技術をヨーロッパから受けとったのはありません。いわば今日の日本の物富み生活の繁栄は、いわばホンコン・フラワームたいなもので、問わるべき人間存在の価値とか根源的な命の問題となると、全くの空虚なものをその奥深いところに残しているのであります。だからリースマンの物富みところ富まざる現状となり、何のための豊かさや問わざるを得ません。

今日、日本はオルテガの言葉をかりれば、貴族の親の遺産ゆずりの道楽息子や、日本の教育はせつせと多量に造り出しているのです。貧乏にも堪えると同時に贅沢の中にも埋没しないような強靱な人間を造りあげた毛沢東の爪のあかほども飲ませたいものです。

インドはベータやウパニシャッドから三千年の歴史的伝統のヒンドゥイズムの上から、近代化をいま進めている

ということに注目すべきであります。御承知の如く、インドは過去二百年余にわたり、英国のために骨の髄まで喰いしゃぶられて参りました。一九四八年独立しましたが、今日においてもその長い間の後遺症は実に大きく深いものがあります。ヨーロッパの意味における近代化とは一体何であつたのでしょうか。産業革命以来の科学技術の進歩發展をもつて驚くべき物質的生産力をあげて来たヨーロッパは、そのためには原料と市場の獲得を必要としました。その英国の犠牲となつたのがインドでありました。キリスト教はこのインドの植民地化の教化活動の先ず尖兵の役を果たし、その後から軍隊の暴力が制圧しました。ですから、いまの七億のインド民族にとりましては、近代化、即ち西欧の科学技術の導入ということに対しては、二百年の長い苦しみが本能的に近代化という事実についてはこれ当然に批判的に受けとらざるを得ません。だから先般亡くなった大統領であつたラダクリシュナン、この方は政治家であつて同時にインドのすぐれた思想家哲学者でして、沢山な書物をもつて知られている方ですが、彼は文明に対する最大の犯罪は、原始人や無教育な人々によってなされたのでは

なく、高度の教育を受けた、いわゆる文明人によってなされた、と強く批判をしております。このことは明治時代の欧化の風靡のために、日本人が自らの生きる伝統と歴史をふり捨ててひたすら西欧化のために日本人の魂を喪失した時代に警告を發した岡倉天心とよく似ております。天心は申しております。若し文明人とは尖兵としてのキリスト教、そして大砲と軍艦をもつて他国を奴隸化することを目的とする人種であるならば、吾人はいつまで文明人に笑われる原始人にとどまることを光榮とする。先覺者の言はいずれも同じであります。

ところで、インドのヒンドウイズムというのですが、これは單なる一宗教を言うものではありません。政治、經濟、文化、教育、更に民族の生活のさまざまな奥深いところまで滲透して、生まれて来ている民族の伝統であり歴史であつて、ヒンドウイズムをもつて、日本の場合に一宗教の名をもつて表現したり、または資本主義とか社会主義とか言つた政治經濟の一つの範疇でもつて表現出来るものではありません。渾然たるインド民族の宗教的な生活のすがた全体を表現するものであります。この伝統の上にあ

って欧米や日本からの科学技術を導入して只今徐々に、本  
当に注意深く近代化をすすめておりますのが現代のインド  
七億の民族であります。このところをいく重にも今日世界  
がインドに注目すべきでし、特に私共日本人が大いに考  
えねばならぬところでありました。

遂、最近まで食糧問題においても、親ソの立場にあるイ  
ンドはソ連から食糧の輸入を多量にうけていましたが、そ  
れもきれいに始末しまして、只今では逆にソ連に食糧を輸  
出しております。あの広大な農地にやがて科学技術の導入  
が成果をあげて参りましたら、インドはいろいろの原料に  
おいて全く日本の無資源の国と異って無尽の宝庫でありま  
すから、将来は実に驚くべき国となりましょう。自動車な  
ども外国よりの輸入を厳禁いたし、すべて国産ということ  
で、すべて生活上の品物においても自給自足を目標に、い  
ま七億の民族が、貧しさにじっと堪えながら、徐々に近代  
化に向ってヒンドゥイズムの上から巨歩を進めておりま  
す。この事実を毎年インドに参ります度にこの目でじっと  
眺めながら、私は将来のインドを刮目して思うと同時に、  
いまは贅沢と便利になれ切って、これが当然だと思ってい

る日本人の将来を眺めて、実に淋しさをこえて肌寒さを覺  
えているものでございます。

### インディラガンジーさんの逝去を弔う

ここで、私は皆さまのお許しを得て暗殺されたインドの  
インディラ・ガンジー首相のことを一言申しあげさしてい  
たきます。

今日ニュー・デリーのヤムナ川のほとりのガートで白檀  
の薪の上に乗せられて荼毗に付せられる。いく百万の人の  
悲しみの中にです。お骨はバブーのガンジー、父ネールや  
母カマラの骨と同様に、アラハバートのガンジスとヤムナ  
河との合流点サンガムでガンジス河に流骨されるだろうと  
思っていました。遺言には彼女の愛したインドのヒマラ  
ヤの山々に放散されることになっております。私も毎年  
インド巡拝団を結んで行っておりますし、毎年ドリケル  
の峠からヒマラヤの御来迎を拜んでおりますから、来春の  
ヒマラヤ全山の神々の座はひとしお思いが深いものがあ  
りましょう。

実を申し上げますと、今日は現代の社会福祉についてお話

をいたすより、同首相の追弔のお話をさせていただいた方がありがたいのですが、そういうこともありません。一言だけお許しを。インドがかつてネール首相がアジア二十九ヶ国を代表してバンドンで平和五原則を世界に向って宣言し、アジアの米ソの間において中立非同盟を宣言しました。この第三勢力としてのインドを中心にアジアの平和五原則は、ネールのすぐれた政治的思想的な力と人格とによって堅持され、米ソの黒い影に対して、重厚な政略的勢力をうまく維持してアジアの発言を無視することが出来ませんでした。その父親の精神を受けこれを堅持して、実に宗教的、政治的、経済的にむづかしいインド各州をとにかく一つにまとめてアジアの大きな勢力として、独立のバブー（父）ガンジー、そして父ネールよりゆずり受けた大きな精神を支えて来たのでした。恐らくはインディラ・ガンジーさんなきあとのインドでは、大きな混沌と分裂と紛糾とがおきることが予想されましょう。

私は宗教的立場からこそ本当の人間形成の教育は出来るものだと信念から、幼児教育より大学教育まで微力でございいますが只今もたずさわっている者でして、いま少女イ

ンディラ・ガンジーがよく熟慮した上からは断乎として実行にうつすインドのクイーンにまで成長された裏面には、父ネールの愛嬢への深い教育的な心くぼりの一断面を思いおこさざるを得ません。

それは皆さまご承知かと思いますが、日本の若い皆さんに愛読されているネールの「父が子に語る世界史」というすばらしい書物があります。日本の学校で教えられる無味乾燥なものでなくて、父ネールが一九三〇年十月二十六日を始めにナイニーの刑務所の中から、毎月許された日に当時十三歳の愛児インディラに語りつつけたものです。一九三三年八月までの三年間、手紙を通して刑務所の中から先ず世界におけるアジアの存在の意義から、長い世界に誇る宗教と哲学の上に伝統をもつインド民族の位置を語り、そしていま闘いをすすめているインドの歴史的役割について筆をすすめ、インドの英国の植民地化よりの独立と自由について父ネールは諄々とわが子にさとすように語りつづけ、インド民族は老いも若きもこの尊い使命と実行に立ちあがることを光榮とすると説いております。その家、ハラハバートのネール家の私的生活について語り、まことに反

英闘争のためには、バブーのガンジー、その妻カストゥルバイ・ネール、その妹のバンディット、妻のカマラ等いずれも反英闘争のために投獄されていますが、一人淋しく孤独の生活に堪えて行かねばならなかったインディラに対し、父ネールは獄中から手紙で世界史におけるインド民族の使命についてあたたかい教育をつづけています。

詳しいことは余りに横道にそれますので略しまして、一番最初に獄中から書き送った手紙の一節を報告いたします。

それはインディラが十四歳になった誕生日を祝う手紙ですが、その手紙の一節にこうあります。「バブー（ガンジー）は監獄の中に坐っている。かれの呼びかけは魔法のように男といわず女といわず、いく億のインド人民の胸の中にしのびこみ、いとけない子供たちさえ、いまや彼らの小さな殻を押し破って、インドの自由の戦士たちの列に加わろうとしている。そして、おまえと私は幸いにもその出来ごとを眼の前に見ながら、この偉大なドラマの中でいく分だけでも自分自身の役割りをもつことが出来たのだ」と、小さい娘に対して先ず父親と共にインド人として行く道を語

り、そして、最後のところでは「わたしたちの国で進められている自由のための闘争を眼の前にみることの出来るおまえは、仕合わせだ。そして、も一つ、おまえは仕合わせだ。一人の大変健康で、すばらしいインドの婦人をお母さんにもっている。迷うこと、困ったことが出来たとき、おまえはこれ以上よいお友達をもつことは出来ないにちがいない。さよなら、インディラさん、そしておまえがインドのために勇敢な戦士になりますように、心からおまえの幸福を祈る」と結んでおります。

やがて、ネールの妻カマラはインドの反英闘争のため婦人運動の先頭に立って闘い、投獄され、遂に胸を病み、重い病で釈放を受けてスイスのローザヌに静養をいたします。その間ネールは一時釈放をうけて見舞に行きますが、タゴールのサンチネタンの塾よりインディラを呼び妻カマラの病床を親子で見舞うことになります。そうした中に父ネールは、当時の有名人のアインシュタインとかロマン・ロラン等と面会の場合には、娘を必ず帯同しました。父親の教育指導でしょう。すぐれた尊敬すべき人からは、その人に接するだけで、人間の成長の上に大きな影響をう

けます。カマラさんは三十六歳でローザンヌで死亡いたし、インドの独立自由のために倒れましたが、お骨をひしと抱いてネール父子は闘いのインド、刑務所に向って飛行機上の人となるんです。

ところで、暗殺されたインディラ・ガンジーさんは、度々の記者との会見で、「特に首相としてではなく一人の女性として、夫々の思いもいろいろありましようか」との記者の度々の質問に対して、いつも「私は首相の地位にある者と考えるより、もっともっと自分を一人の自由のために闘う戦士とも考えているのです」と答えております。

少女時代に一人の勇敢な戦士 (brave soldier) となるようにと、父親に願われられて来た彼女は、首相の地位にあるとき、女性としての感想を求められたとき、いつもこの勇敢な一戦士として発言しております。インドの自由と独立のために生涯を捧げた女傑としてふさわしい答えですが、この言葉、またこのような答えへの願いは「父が子に語る世界史」の最初にネールが願いをこめて書いた言葉でした。

そして、くしくも暗殺をうける前日、即ち十月三十日、

オリッサのヴーブネスワールでの公開講演で、インディラ・ガンジー首相は「私は長生きしようなどと思っておられません。こんなことに氣を使わない。私の命がインド国民への奉仕で失われて行くことは何とも思っておりません。若し今日、私が死ねば、私の血液の全部がわが国民を鼓舞激励することになりましよう。」と訴えております。今日ヤムナ河畔で茶毗にふせられるインディラ・ガンジーさんへの追弔の言葉はこれ位にしまして、本題にもどらせていただきます。

### 近代ヒューマニズムのばくろされた悪魔的性格

ヨーロッパの文明が過去長い間インドや中国を含むアジアを支配して来たのですが、一体ヨーロッパ文明の根本的な性格は、一体どのようなものであったのでしょうか。現代文明が楽天的な進歩史観の上からと将来における人類のはかり知れない仕合せを物質的生産力の上から約束して参りました歴史的事実に対して、いまやそれが人間共のうぬぼれの虚構であることがばくろされ、自らの人間存在について根本的に問い直すべきところに来ております。

現代の物豊かな文明世界をここまで造りあげて来た支柱

は、科学技術と巨大な資本力との抱合の上に、無限にまで上昇出来るという生産力の可能性を夢見た近代から現代にかけての人間中心主義の世界観でありました。近代初期の

ヒューマニズムでは、その初期にあつてはギリシャの古典を通して生命に溢れた人間と自然のとらえ方であつて、人間は冷い理性的な存在ではなくて、意志し、行動し、情感ゆたかな全人間的な生命としてとらえられました。だから、人間とこれを取りまく周囲の環境としての自然との調和的なとらえ方にしても、当時の芸術的労作がなすように人間と自然とは脈搏相通する共同の命に生きつづけていました。自然は命あり価値あり美なるものとして、人間との共生きに息づいていました。ところが、その後科学や学問知識の開拓がすすむにつれて、この創造と情感ゆたかな人間と自然との共同の命のとらえ方が変貌して行くことになります。特に十七世紀に大陸にデカルトが出て「われ思う、故にわれあり」を学問の前提として、この疑うことの出来ぬ自我の立場から、人間を思惟する自我と規定し、ここに生命にあふれた人間を一方的に理性的な人間という理

論的、抽象的なものに規定しました。そして、この理性的自我に対立するものとして、あの美しい生命と情感にあふれた自然を単に物質として、空間的存在として規定してしまつたのでした。

このように主観的な自我と、これに対立する客観としての対立的な自然ということになりますと、そこに人間と自然との間に対立闘争が当然にされます。主観とこれに対する客観と申しますと、英語では Subject と Object となりますが、この客観という言葉はギリシャ語から出て来ていますが、それは「前に投げ出されたもの」という意味です。物としての自然はどん欲な人間の前に投げ出されたものということであつて、人間は主体として投げ出されたものに挑むものとなりましょう。猫の前に出されたかつおぶし、と言つた調子です。欲深い近代の人間、だまつて傍観しているわけはありません。但し、この主観と客観との分離対立、従つて人間が自然を段々に支配して参りますことはヨーロッパ近代のものではなく、実はすでにキリスト教そのものから当然に発生して来ているということです、それは後に申しあげます。



ともかく、このようにして近代人は対象的な自然界に行われている因果必然の法則を科学的学問にあって抽象し、ひき出しまして今度はこれを逆手にとって、科学技術の応用によって、いよいよ自然界を支配し、征服して、人間の物質的な幸福に役立たせることに成功して来しました。

このように近代ヒューマニズムの初期では生命の共感を通して人間と自然とが統一的、調和的にとらえられて来たのでしたが、やがて人間と自然とは完全に分離せられ、それまで自然の中に美しく生きていた生命や価値的なものはすべて排除され、自然とは、ある一定の空間的な延長をもつ機械的物質というものになり、これに対して、人間は理性的な自我として、もの言わぬ自然を利用し、支配することとなりました。だから中世の神を否定した近代の人間は、自らが言わば神の座に着いてしまったのであります。

このデカルトの理性的人間と単に空間的な延長をもつ物質としての自然との対立分離が、その後のヨーロッパの思想や哲学を支配して来ました。例えば、当時、またその後大きく影響を与えていくカントの哲学は、この自然に対する活動的、創造的な近代人の性格を思想的に表現するも

のでして、或はその後にヨーロッパの資本主義社会の能動的、活動的な人間のあるべき理念を哲学化した代表的なものであります。理性的な人間の自我が理論理性として自然界を構成し、実践理性が、この近代の創造的な人間の人格を理想化し、まさに近代人の創造的な活動を哲学的に大きく理論づけたものであります。

しかし、このカントの近代人の美しい創造的活動的な人格の理念も、それはどこまでも近代資本主義社会である近代の市民社会の人間の理念を表現した哲学でして、現実近代から現代に大きく発展した資本主義社会に生きる慾望的な人間の現実を表現したものとは言えません。この社会に生きる人間はカント哲学の表現する美しき又厳肅な人格として定立されるものではなく、あくまで自然を支配し破壊し、利潤を追及していくどん欲な慾望的な人間であります。

ところで、十八、九世紀における科学、技術のすばらしい発達によって、資本主義経済の生産力は高度に上昇し、自然の改造支配によって物的生産力は無限にまで発展を予想させ、市民社会に活躍する経済人は、慾望の満足と利潤追及に狂奔しました。この利潤追及による資本の蓄積は、

更にこれによって生産の増大を予想し、資本主義の経済体制の齒車にくみこまれた経済人は、いや応なしに、いかなる倫理的批判もいかんともなしえず、この体制組織の生産力増大のための推進力ならざることを得なかったのです。このような性格こそ、近代から現代にかけての市民社会を支えて参りましたブルジョアジーの性格でございました。

ブルジョア社会においては、人間労働の対象化される原料として自然界が単なる物質にすぎないことは当然でありますが、更にはこの社会組織の中で労働し、商品を生産し、また商品消費してゆきます人間自身も、その理性的、人格的な自由なる人格としてのものとはとつゝの昔に失われて、人間性などというものも物象化され、非情化されて参っているのです。人格、節操、命の尊厳などといった人間存在の本質的に大切なものは、現実の生活においては金とか権力とか言つたものに押しつぶされて行つております。言わば、人間の存在もあの物的自然と同様な次元にまで類落せざるを得なくなつて来ておるのでございます。

あのデカルトは人間を理性的自我として確立することに、よつて、二つの世界を切り落したと言われています。即ち

上に向かつては、それまで長らく人間の上に君臨していた神を追放しました。そして、人間より下に向かつては動植物を始めとして、人間自身を生かしていくれる母なる大地自然を足で踏みつけまして、これを単なる物として扱い、やがて経済的利潤を生み出す対象として、勝手放題に切断してゆきました。ところが、このように人間の慾望本能をもととして發展した高度の資本主義経済体制は、これを押し進めていく中で、人間の物的生活の無限にまでの發展を夢見て来た当の人間に対して反抗することとなつたのです。人間の非人格化、物象化、即ち人間の価値なども単に物や金で、はかれてしまつて、質は量に換算される一物体にまで墮ちて行つたのであります。十九世紀から二十世紀にかけて物質的生産力の上昇と華かな人類の仕合わせを無限にまで夢見た人間どもは、この時代を進歩の時代という合言葉をもつて表現して来たのですが、それが前世紀後半より今世紀にかけて、果して人類は進歩したのかと、ここに大きな反省と批判の時代に入つて参りました。

十九世紀後半から今世紀にかけての世界の先進国、即ち高度の工業資本主義国においては、今日恐るべき環境破壊

による公害によって恐ろしい自然の復讐を受けております。特にわが国の如き面積のせまい国においては、世界で一番に大きい復讐を受けております。実に自然はデカルトなどが小さな知ではかった如き單なる死せる物ではなく生きものです。そして人間に語りかける生きものなのです。

現在のような慾望の人間のわがままをすすめて、先進国、高度工業国における贅沢をつづけようとすれば、すでに地球上の資源の有限性が科学的に証明されて来た以上、地球の死滅から人類の将来の滅亡ということの事実となっていくことと思います。

### キリスト教的世界觀の崩壊への反省

ここで、自然からの復讐として今日公害が大気、河川、山林、大地、海水等の汚染や死からどんな恐ろしい結果を生み出しておりますかということについては、科学者、特に生態学的な立場から詳しく報告され警告されているところであります。その具体的な詳しい報告を申し上げたいのですが、時間がございませんから略さしていただき、先きほど申し上げました近代から現代にかけて華かな文明国を造り

あげて来ましたヨーロッパ的な世界觀である人間中心のヒューマニズムは、実はもとキリスト教そのものから当然に發展して来ておりますことに一言ふれておきたいと思ひます。

元來、世界觀、人生觀と申しますのは、私共人間をとりまく自然とか社会に対する人間の評價、即ち經濟的価値、藝術的価値などいろいろの立場から眺めることになります。が、このような夫々の立場の上に立つて、人間が自然に対し、社会人生に対して生きていく姿勢を言うのであります。ですから、今日の恐るべき環境破壊による公害についても、根本的には私共人間の生きていく姿勢の問題から来ているということを感じることが極めて重要なことです。人間の生きていく姿勢の問題なのです。單なる局部的な治療や政治的行政的な立場から解決のつく問題ではありません。局部に噴出した公害の被害に対して医療や金額で解決さるべき問題ではなく、もっと根本的に私共人間存在の生きざまの改変によらねばならぬということです。かつてデカルトによってとらえられた人間中心の二元論的な解釈が、更にさかのぼってキリスト教の世界觀から發展して

来ているという意味において、今日ではキリスト教自体に批判がむけられております。そして、地球や人類の将来の保全のためには、環境破壊をさけるためには、人間の生きる姿勢を説く世界観として、東洋的なものにその解決の道が求められて来ているということがあります。

いま、その一つの例を挙げましょう。リン・ホワイトの「機械と神」にきいて見ましょう。ホワイトはカリフォルニア大学の歴史学教授でして、現代の文明批判の分野においてアメリカ科学振興協会で行った「現下の生態学的危機の歴史的根元」という講演が、大きな反響をまきおこしました。「機械と神」という一寸見ただけでは相反する二つの組み合わせのようですが、いま申しました講演を中心に十一の論文よりこの書物は成り、ホワイトの論旨はこの「機械と神」という標題からその主張がよく解るのです。

この題名は日本語へのほんやくの場合の意識でして、原題は「神から天降る機械」と訳されるべきものでした。即ち機械に象徴される近代の科学技術の文明が、外見には一寸異質的に考えられますが、実は神から、即ちキリスト教から天降って来たものだというのです。キリスト教は天地

創造の唯一絶対の神を設定する。神は天地を創造し光と暗とを分け、水界を生み地に植物を生ぜしめ、天体には昼夜を照らしめ、また鳥と獣とを生み、最後に人間だけを神の似顔として神の理性的な分身を与えた。「生めよ、ふやせよ、地に満てよ」と、人間は大地の動植物等のすべてを支配することを許された。人間は神の命の分身を受くることによって、動植物等の自然とは次元を異にする存在として許されました。ここに地上における人間中心の世界観が、やがて人間の知性によって学問、科学、技術の発展を招来させることによって、人間の慾望満足の資本主義的文明社会を造りあげて現代に到っているのであります。

ですから、ヨーロッパにこのキリスト教世界観がなければ、近代の理性的人間の科学技術による地上の万物支配などという支配者としての思いあがった姿勢も生まれて来なかったでありましょう。科学技術の進歩による自然破壊が、物質的生産の豊かさということで、道德的にも善であり、また人類の進歩だなどと長い間盲信されて来たのです。しかし、これは人間の恐ろしいわがままのうぬぼれでありました。このような仮定、事実が、今日すでに許され

ぬことを示しておりますが、ここにキリスト教はとてつもない罪の重荷を人類に負わしめてしまったと言わざるを得ません。キリスト教徒にとつては、一本の樹木は単に物理的事実以上の何物でもない。神聖なる森林とか、曠野に大自然と闘かつて厳然として屹立する大木の生命などという考え方は、彼らにとっては論外であつて、まさに偶像崇拜の対象にしかすぎません。

以上のようにホワイトラは今日見る環境破壊より來たる公害の生態学的危機の根元をキリスト教の世界觀のうちに見ております。そして彼はかかるキリスト教より出ている地上における人間中心主義や反物質論を救うものとして、もう一つのキリスト教的考察を提案しております。アラジンの聖フランチェスコの世界觀です。即ち自然は人間に奉仕する單なる物ではなくて、神の被造物として、それ自体価値あるものとして、自然のあらゆるものが、あらゆる生物が神の被造物として平等の立場にあるといふのです。フランチェスコによつては、太陽も月も兄弟姉妹であつて、万物夫々個性を生かしつつ、神を讃えているのです。小鳥も人も水も山も、すべてが神の尊さを讃美しているのだ

す。彼は人間のみが無際限に他の被造物を支配する考え方をやめて、人間を含むすべての被造物の平等性という考え方をいたしました。ホワイトラはかくフランチェスコを生きた學者の聖者としたのであります。

私はこのホワイトラの論旨には共感するものですが、キリスト教的世界觀の崩壊を前にして、フランチェスコへの道は、何としても余りにも消極的な道としか言えません。すでにシュワイツァー博士が、キリスト教的世界觀の中にありながらも、東洋の汎神論的な世界觀に生きながら語っています。「人間にとって植物の生命も人間のそれと同じく神聖であり、苦しんでいる生命を助けようと献身する、そのとき人間は始めて倫理的である。生きとし生けるすべてのものに対する無限の責任のみが普通の倫理として思考の中に基礎づけられる。人間対人間の倫理はそれだけでは全部ではなく、一般の中の一つの特殊な關係でしかない。したがって、『生命の畏敬』は愛、献身、共歎共苦、協力と名づけるものすべてを内蔵している」と『わが生活と思想』において自分の世界觀を述べていますが、いかにも東洋的な思想に近いものが感ぜられます。

もう一人現代のビートやヒッピーの生活姿勢の中に積極的解決を求めている米国の社会学者リチャード・ミーンズ教授の名をあげておきましょう。彼は現在の生態学的危機を回避するには、超越的一神教のキリスト教でなくて、

東洋的汎神論的な自然を求めて生きようとするヒッピーの哲学に、危機を乗り越えるものを見ようとしています。只今インドへは米国やヨーロッパから沢山なヒッピーが年々沢山に来て、例えば、ベナレスの泥舟やゴアの海岸やネパールのカトマンズにいよいよ定着して来ております。面白いですよ。ヨーロッパ人は二度インドに来ました。一度はすでに申上げたようにインドを植民地化し、くいしばるためにです。ところがそうした侵略の上につくりあげたヨーロッパの機械的文明社会の中でノイローゼになった若者たちが、母なる自然のままの自由なインドに再びやって来まして牛糞の土間にくるまって生活し、文明病のノイローゼをなおしてヨーロッパへ帰って行くのです。全く面白い現象ですね。日本人だって、年々インドの大地やヒマラヤの麓にあこがれてやってくる者が年々とふえて来ています。その心情はよく解ります。すでに十回もインドの大地

を歩いています私も、ある意味ではヒッピーのはしくれでありますうか。

### 仏教的世界観への回帰

以上は先進文明国における生態学的社会病理に対して、いま真剣に討議されているほんの一端を申上げて来たのですが、いずれもキリスト教的世界観の崩壊を前にして反省が深められておるところでして、東洋の情感的な自然のうけとり方に、人間のすなおな謙虚な生きる姿勢としての世界観を求めて来ていることを知りました。ここで私は仏教的世界観が人間の生きる姿勢として、今日以後極めて重要な役割を果たすべきものであることを申上げることとなりました。

詳しく申上げる時間ありませんし、皆様は仏教に深い関心やご研究を持ってられる方々でいられます。ですから、ここでは菩提樹下の釈尊のいわゆるおさとの様子、そして、この釈尊のうけとられた釈尊仏教の世界観の大乗仏教的な思想的信仰的表現であります「法華経」の世界観を申上げさせていただければ、仏教全体の世界観が、ヨ一

ロツパ的なそれと異なるどのような人間の生きる姿勢を示しているかということがお解りいただけましょう。

ここはウルベラの村のピッパラ樹の大木が夜あけの空を蔽って亭々として立っています。ようやく東の空の白むころ、小鳥がさえずり始めた。一葉一葉が新しい日のよろこびに生き生きと息づいている。夜明けの清澄さ、あかるさ、この美しいさわやかな朝をゴータマ・シッダルタは今まで考えもしなかった、土も太陽の光、力、それはウルベラの自然に、あかり、めざめを与える。いままでわからなかったが、わが力で自分は生きていると思っていたが、これこそ大きなあやまりであった。自分をつつむ大自然は互に助け合い、草木を生かし、人々を生かし、われいまこれら大自然と共に生き生かされて、同一の大きな命の中に息づいている。鳥の声にも、陽の光にも、これまで感じなかった新しい力と共に助け合っている美しい姿を見ることがなった。おお、親しき草よ、木よ、小鳥よ。すべてに合掌して拝まるるなつかしさ、親しさ、そして尊さをもつこととなった。

このような生かし生かされていく宇宙との縁起の一体観

が、菩提樹下に座られた朝の心境でありました。天地自然と共に生き生かされていく万物同根という生命共感の感動の上に生きていく姿勢こそ、人間本来にめざめた謙虚な姿でありました。仏教的世界観にあっては、人間中心主義などという人間だけということとは使われないのであります。人間と言わずいつも「衆生」という言葉を使っています。衆生とは衆縁生起ということで、因縁果によりて生ずるすべてのものを言います。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天等々、更には草木等の自然界とも共同の大生命によって、互に生かし生かされていくことを示しているのでございます。

この釈尊仏教の壮大なる世界観を思想的、信仰的に、また創造的、発展的にととのえて行きましたのが、大乘仏教の「華嚴経」や「法華経」などでありました。

ここで「法華経」のすばらしい世界観について一言述べさしていただきます。ここでは人間だけのめざめとか、救いなどとは言いません。国土成仏、草木悉皆成仏という宇宙人生が互に全体に相即相入しながら綜合進動して行く一大生命の救済のはたらきを説示しております。同経

方便品を中心として有名な一念三千の宗教的論理信仰が出来ております。先ず十界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天人、声聞、縁覺、菩薩、仏としまして、衆生の世界を十界に分ける。しかも、この十界が他と夫々相入融通し合つて相映じていますから百界となる。その百界には夫々の性格や行動のすがたを本来的にもちます。即ちありのままのすがたである如是相、夫々の性質たる如是性、また行動をおこす体である如是体、そのはたらきの如是力と言つた具合に、十如是のカテゴリと言いますか、根源的に衆生にはこうした性質のはたらきがそなわつております。そこで百界の衆生に十如是をかけまして千如是となります。それにこれらの個体、これらの集合体、そして住む国土という三世間というものがあります。三世間とは個体としてはこれを構成する五蘊世間、これら個体の集る衆生世間、そしてこれらの集り住する国土世間があります。この国土世間は草木国土と言うことで自然界の一切を示すものです。この三世間を先きの千如是にかけますと三千となります。三千の諸法とは宇宙の根源的な総合的な大生命を言います。私共のきわめて僅かな一瞬の一念の中にも三千の諸法

を具足しておることを説いております。要するに一念を放てば全宇宙の命となり、宇宙を収むれば一念に帰するということ、宇宙間のすべてのものは、そのもとは万物同根の根底の上に立つていふと言へることでございます。

ですから、ここで大切なことは、宇宙の総合進動してゆく大生命は、ただ人間のみにではなくて、草木岩石にも遍く通じ合つて、有機無機、すべてのものが、共同の命の中に脈搏相通じて生きておるということでもあります。しかも、宇宙間のすべての衆生は草木国土までも包んで、刻々と総合進動の活動をすすみつつ最高の仏の絶対価値にまで向上進動しつつあるのである。全宇宙をあげて仏たる完成の境地に向つて完全進化の道に發展しつつあるということでもあります。

だから、地上における有機無機と言つた生物無生物などと言つた区別の如きは、現代の科学的知識からの一つの仮説よりした分析的な便宜的なものであつて、宇宙人生の眞実の相となるものではありません。この宇宙は一切をあげての生命の大活動体であつて、人間と言へども言わばこの活動的の生命の中の一つの細胞にすぎず、草木の如きは更に



申せば人身における毛髪 of 如きものと言えましようか。ですから、人間の仏への完成成仏は、同時に毛髪 of 成仏でもあります。そこで草木 of 成仏ともなります。日蓮上人が「草木成仏口訳鈔」の中で「草木にもなり給へる寿命品の釈尊（宇宙生命）なり」と申されるのは、この事実を申すのであります。

### 現在の社会福祉への根本的な疑問

ここで、私は社会福祉とは一体何を言うのでございまいやうと問い正したいのであります。制度 of 改変修正を言うのでしやうか。或は高度工業資本主義化のもとに不幸な生活を送らざるを得ない人々に、当然の義務として国家が各種 of 物質的な生活を出来るかぎり保障することでありましようか。はげしい産業社会に吸収されて大切な育児を犠牲にまでして働く婦人方のための厚生施設を言うのでしやうか。資本主義社会が進むにつれてその構造組織からは当然に家庭の社会的にさまざまな人間性を歪曲する事実が必然的に頻発して来ますが、日本のいまのありさまでは、それらは制度的に物質的に保障していく施設、又は政策が社会

福祉という概念によって示されておるようであります。しかし、こうした西欧的な制度や物的な施設や政策をもって社会福祉という事実の解決となるのでしやうか。

大変失礼な申し分ですが、私は公園の広場でお年寄りがゲートボール大会を賑かにやっておられる姿や、早歩きマラソンをやられたり、或は歌唱大会をたのしくひらいておられるのを眺めておりますと、それらは健康増進の福祉や趣味に生きようとする結構なことではありますが、何か根本的なものが忘れられている思いがいつもしております。

現在 is 未だ後進国でございまして、申上げました如く、只今近代化をすすめていますあのインド of 思想的指導者でありましたラーダクリシュナンは、「インドの哲学史」という何千頁に余る膨大な著書を書いていますが、一方「ヒンドウの人生観」「信仰の復興」「宗教における東洋と西洋」「宗教と社会」など、彼の沢山な著書の中で申しております。基本的には西欧は物質と制度の国であると。資本主義も共產主義も人間主義の上に生れ出た兄弟であって、共に物質と制度中心主義のものであり、これらには東洋の精神とは相容れぬものがある。インド of 近代化はインドの

一面物的、技術的なおくれを合理化しようとする精神的態度を生むだけではなく、近代化の精神的原理そのものをインドの歴史的伝統文化の中に見出そうとする独特の精神的態度であるということを訴えているのでございました。

たえず自国文化の伝統の中に人間存在の眞の姿を問いつつ、外的形式的には遅々としていましても一面ではたえず近代化に警戒的でありながら、次第に西欧的合理主義とヒューマニズムを自国の大きな伝統の中に吸収してゆきつつある現在のインドの動向は、言わば人類の巨大な一つの実験と言われましようし、インドが、私共日本を始め、世界の先進文明国に向って、一つの大きな課題を問うているところであります。

社会福祉とはただ物や制度の次元のものに終つてよいものでしょうか。全く近代の西欧文明を追つて今日の繁栄を来たしたわが国においては、保守も革新も目をひらけば福祉国家、社会福祉の拡充をモットーにしています。たしかに、日本は物質的な福祉の点からすればアメリカ、スエデン、デンマーク等よりはまだひどく低水準にあることではあります。人間存在の福祉とは、単にそうした物質的

或は制度的な面からのみ解決されるものでないという大切な人間のとらえ方が見失われております。今日のこの事實は、日本人が明治百年、欧米の科学技術文明を盲目的にとり入れて、自国の歴史や伝統をすっかり捨ててしまい、人間の生きる根源的な命、即ち故郷を喪失して平気で今日まで来ているからです。いま申し上げましたベダーやウバニシヤッド以来の長い伝統の上に立つて苦闘しているインドの巨大な精神的試練とは、全く異つております。又、言つても現在後退しているとは言ひましても、欧米にはキリスト教が清水の如くに家庭の中に生きてはいますが、日本では人間の根源的存在を支える何物もなくしてしまつています。しかも、今日、先進文明諸国には、人間の福祉というものは単に物質的、制度的な立場からのみでは全うせられないということで、社会福祉がすすめられているにも拘らず、さまざま人間性の否定、人間破壊の悲劇が毒物のように生じております。

私はこれまで幼児教育から大学教育まで、まことに微力者ですがたゞさわつて参り、いろいろの事実につづかつております。例えば、働く婦人のために託児所や保育園、或

はベビーホテルなどが多く出来ています。しかし、これら厚生施設は結果的には先進文明国では子供たちの仕合わせのためでなくて、大人即ち親のためのものとなっています。それは今日では先進文明国の生活は、何と言っても贅沢になって来ていますから、婦人たちも子供をあずけてでも環境社会に応じたそれ相應の生活をいたしたいということとは人間の本能でしょう。どうしても生活のために働かざるを得ないので乳幼児を人に託する場合も勿論ありますが、そうではなくて周囲の向上した文明の贅沢な生活に準じたいということから大切な乳幼児期を人手にまかす場合も多いでしょう。

今日すでに定説となっている如く、幼稚園からではおそい、乳幼児の脳の百四十億の神経細胞の約七十パーセントが、この三歳までに周囲の最も親しい関係にある母親に模倣して、からみ合いながらセットされて出来て行きます。他の動物と全く異り人間の脳の細胞は母親のおなかからは全く白紙で生まれ出て、それから一番に近い周囲の大人の言語動作を模倣して脳の神経細胞はそれをまねて出来て行きます。大体乳児は五ヶ月もするとこれが自分の母親とい

う愛情の情緒関係が結ばれて、脳の成長が母親に似てからみ合いながら出来て行く。ですから母親なり家庭関係のふんいきが、愛情、安定感、是認といったあたりの環境であることが、精神衛生上、この三歳ごろまでに絶対に大切で、それが先進文明国の家庭では、生活上の必要をこえて慾望を満たすために、母親は乳幼児を他人に託して働きに行きます。託児所において何人かの保母の婦人によって養育されて行くと自分の母親への愛情のきずながうせて行きます。極端に言えば、のら犬が見知らぬ男に偶然にえさを貰うと、どこまでもこのことについて行くのと同じような性格が出来てしまう。こういう子供は人の愛情をうけること、人を信ずることを失い、成長するにつれて、一番大切な母親との愛情のきずなを失い、登校拒否や自閉症におちるものが多い。この三歳までの脳の神経細胞の成長の大切なことについては、東大の先生でした時実利彦先生のこの方面の研究実証が今日定説となっており、先生はこの医学的見地から日本の教育環境について文教審議員として重要な提言をして来られました。更に文明先進国の家庭破壊、即ち離婚とか、核家族による育児放棄と老人追放など

の問題がここにあります。

青少年の問題の場合には、先進諸国にあっては、全く大きな問題をかかえております。物富みところ富まざるところから、例えば、スエーデンやデンマークの福祉国家として、制度のよく整った国にいったんな現象が多く出ていますか。詳しく申上げる必要もございません、皆さまよくご承知の通りです。青少年のタバコ、麻薬常習、そして父親不明の乳子の国の保障、そして、青少年の自殺ということ。そして、これまで余り見られなかった老人の自殺がふえております。何しろ国家が福祉保障を完全に近くするために国民の税金によりますが、それが働く者の賃金の半分近くなり、いまでは社会党から保守政権に代っています。それにこれらの北欧諸国では、さまざまな社会福祉の政策実行に現場で働く人々の官僚化という現象が生まれ、人間性という美しい情感が失われつつある。例えば病院へ朝十時に出かけ、午後二時、三時になって漸く看護婦さんに脈搏をとられるという例など、健康人ではないと病院へは行けぬという奇妙な事実を示しています。もともと社会福祉という人間存在の根底に流れている人間の共感同悲

のあたたかさなど、てんで失われています。

更に一言申しておきたいことは、日本の只今の青少年の教育です。この問題についてはとても大きな問題でございますので、こんなときに申上げる時間もございませんが、ただ皆さまにかつての一九六八、九年をピークにした東京大の争乱を最後にした学生争乱の歴史を思いおこしていただきたい。あれだけ世界を騒がせましたが、問題はいまだ解決されていません。勿論、この争乱は先進文明国全般にひろがったもので日本だけではありません。世界的に彼らの求めた合言葉がございます。「いかに贅沢な社会であっても、死ぬほどに退屈な社会に生きるより、どんなに貧乏な社会であっても、そこに生きがいが求められるような社会をおれたちは求めている」。これが彼らのモットーでした。日本では池田内閣の所得倍増、高度経済成長の名のもとに日本教育に産学協同の教育が産業社会から求められて来ました。そして、今日ますますこの一線を突き進んで来ております。産学協同とは、大学を出ると同時に高度の機械技術と管理体制のしくみの中にがんじがらめにおりこまれて一本の釘の役割を果たして行くことです。人間性と

か人格とか言ったものを捨てねばなりません。これが世のいわゆるエリートでした。

しかし、人間は単に生物学的次元に満足出来ません。文化的な存在として、人間存在の根源とか生きることの意義や価値を問うことなしには本当には生きて行けぬものなのです。だから、こうした産業社会に自分の人間性を失うのをきらって、この社会から進んでドロップ・アウトする連中が多く、これがヒッピーの連中であって、今日と言えどもその現象は多く見られるところで、彼らは彼らなりの一種の哲学をもっています。

私の申し上げたいことは、今日の日本の高校や大学で、ここで、人間存在の意義、人生の意味とか価値、わかりやすく言えば人間としての生きがいというものについて教えられているかということです。客観的断片的な知識のつめこみだけです。知識は説明の言葉であって、そこからは私はどう生きねばならぬかを教えません。この私が主體的に実践的にどう生きたらよいか。人間として生まれて来てよかったという、人生への感動を若い者は求めているのです。が、今日の日本の高等教育はこれに応えておりません。だ

から、あの学生反乱の時代には殆どなかった青年の自殺という現象が、いまの物にめぐまれた時代に大変にふえて来ております。それは人間の生きる目標とか、人生の意義とか価値について教えられていないからです。

そして、最後に老人の生き方であり、この問題は高齢者の層の厚くなりつつある今日、福祉の大変に重要な問題として皆様各先生方のご指導をいただいております。最近この方面に関する書物が、日本にも外国にも続々と出されております。私は思います、美しく老いて行きたいということです。美しく老いると言うことは単に物や制度だけの問題ではなく、ご本人のこころの姿勢であります。老人にとりまして一番に問題となりますことは、言うまでもなく病氣に対する処置と孤独の淋しさを除くことと、そして誰でもやがて迎える死の問題に対処することでありましょう。

私共はどんなにしても死を離れること、或は向うへ向うへと押しやって生のみを考えることは出来ません。日本人は外国人と異なつて死を考えないように向うにやって、いろいろの遊びごとで死を見ぬようにごまかしているだけで

す。むしろ死を根底にしてそこから見かえされた生であつてこそ充実した生であつて、また強力な人生の生き方が生まれます。いまの日本人にとっては死が何かタブーの如くに考えられています。これは無宗教者の天国日本として外国人から笑われているところでしょう。外国の高校や大学では死の学科がごさいます。医学においても勿論そうにして、死は敗北でなく勝利であるという、希望とよるこびを与えるように指導します。あのホスピスの運動などもこの点では成果を挙げております。私は老いるということとは恩寵であると受けとっております。年と共に人生のあかやあくがとれて参りまして、これまで墨絵を遠くから眺めるように、ぼんやりしか見えなかった人生の行くえが段々はっきりと見えてくるということです。からだの方は段々駄目になってくるのですが、こころの世界において一本の光が段々と見えてくるようになります。

いまの日本人にはどうでしょう。人生のゆくえ、わが身のかえり行くふるさどが見えておるでしょうか。やき場の一にぎりの灰で終りではないですか。やき場を乗りこえて、ふるさどである天地の大いなる命の世界にめでたく迎

えられて、それから尽十方界に向かつての浄土化のはたらしきを無窮にわたってつづけさせていただくことになるのです。死は敗北ではなくて本当に生きていくという大往生なのです。

このように老いゆくことは恩寵として受けとって、日々生かされて生きて行くという充ち足りた感謝とよろこびに生けることでございます。いまの日本の老人福祉について、このことが少しも説かれていないようです。老人の方々がゲートボールや運動会や趣味に生きなさることは結構であります。日本の老人福祉の運動には、こうした精神的な、いわゆる宗教的な人生の受けとりが少しも説かれていません。長い自分の人生をふりかえりまして、ただ愚痴や不平をくりかえしているだけでは、からだもだめになりましょう。それに反して、日々希望と感謝の心で、いかされて生けることのありがたさをしみじみと味わう信仰的な受けとりが、老人の身体にも、どんなにか平安と落ちつきとを与えてくれて、健康を保って行くことになるでしょう。

## 仏教と社会科学

以上、雑談の如きお話になりましたが大変に恐縮に存じて

おりますが、私は現在の日本の社会福祉が、殆ど物の面から、また制度や組織や設備の充実改変と言ったところから進められて、もっと人間存在の根本問題、即ち人間が本当に生きるということはどういうことか、又人間の本当の生きがいとかよろこびというものはどういうものかと言ったことにまで及んでいないと思います。福祉の事業にたずさわる方々、又福祉の対象となる青少年たちの人間の主体的な大事な問題にまで切りこんでいくことが欠けているのではないかと思います。つまりは福祉の対象である複雑な煩惱妄念をもった生きた人間が、古い生物学の次元とか、或は社会科学から眺めた制度とか組織の中の歯車の一つとして対象的に見られている部分が多いということです。即ち単に人間を生物学的次元からのみでなく、言うなら文化的な面、即ち人間存在の根源的実存的な立場から福祉の問題のすすめられることを主張するのです。いかに物にめぐまれなくても、こころの空しさ、空虚さというものは充たさ

れるものでありません。こうした空気がいま日本社会の老いも若きも、すべての者のところにしのびよって来ているのではないですか。校内暴力、老人の孤独、自殺などの病源の深いところはこんなところにあるのではないですか。生きる目標や、意味をもたぬ人の行動としては当然のあらわれでございましょう。

ですから、私は先きにヨーロッパ的な人間中心主義の世界観の上に招来した今日の繁栄と、東洋の仏教的世界観、即ち人間と人間との共生平和、人間と動植物、即ち人間と自然との共生調和と発展の世界観の特色と相異とを申し述べて、日本は明治以後全くに主体的な伝統をなくして、ただヨーロッパ的な科学、技術、学問をうけとって、今日の繁栄をなして来たことを申し上げました。そしてインドのラダークリシュナンは、西欧文明は本来的に物質と科学技術の文明だが、東洋のものは宗教的、哲学的な主体的な長い伝統の上に、西欧の科学文明を批判的かつ周到な注意をもって（主体性を喪失せざるよう）とり入れて行く精神的文化だと強調していますが、いまの日本にとって、福祉問題を考える場合にも、この主張は大切な提言であると思いま

す。上述の仏教的世界観は、単なる思想ではなく、人間の主体的な実践となつて確証されてくるものであつて、こうした仏教的世界観、人生観を主体的に身にもちつつ福祉の仕事を進めるべき必要が絶対に今後大切だと思ひます。

勿論、この仏教世界観の上から社会福祉の仕事をするめることは、今日の高度資本主義社会より生まれてゐる人間性否定の悲劇を社会的立場から分析解明する社会科学の学問的労作を無視したり、またこれと矛盾したりすることがあつてはなりません。日本人は全く性急な民族で、これまで社会科学と言へばすぐマルクス・レーニン主義だなどと思つてすぐそれにかぶれて来ています。これも上述の如く、マルクス・レーニン主義の世界観に対決する世界観人生観を、日本人は明治以後すっかり捨ててしまつて、何もありません。だから日本の若い連中は、全くからっぽです。からマルクス主義が無批判的に簡単に受け入れられました。この点ではヨーロッパはちがいます。キリスト教が世界観人生観としてありますから、どんな思想もこれと一応対決します。だからソ連や中国型のようなマルクス共産主義はそう簡単にはうけ入れられません。何らか着色をうけ

ます。先年、私はロンドンでハイゲートにありますマルクスの墓に車に乗つて行つてくれと申しましたが、運転手は知らぬと言う。道々、五、六人にきいても知らぬと言う。それで共同墓地へ行けとさしずして、そこで漸くさがしてました。どこの国の人が一番多く来るかと番人にきいたら日本人だと言いました。

マルクス・レーニン主義は社会科学の一つで、また特異な性格のもので、と申しますのは普通社会科学と言へば、マックス・ウェーバーの如く、それは価値論や実践論などをその社会の法則の分析の中には有しません。資本主義社会の組織の分析解明であります。ところが、マルクス主義は方法論として唯物弁証法という哲学的な世界観をその中核に有するものです。一種の歴史哲学です。世界観となれば、いかに生きるか、いかに実践するかという人生社会に対する価値的な見方が生まれてくる。いまの資本主義社会を階級闘争を通して打倒していく革命運動の中にこそ人間の生きがいを求めるということで、生きる行動の実践原理をもつのです。

そこで宗教もこの人生社会に対していかなる姿勢で生き



るかを説く世界観的なものですから、ここに唯物弁証法を中核とするマルクス主義と宗教とは世界観をめぐって矛盾対立することになります。しかし、唯物弁証法に於ては、なぜわれわれが現代社会の改革的実践に立たねばならぬかの重要な点について、マルクス主義の革命的な唯物弁証法の立場からでは説明出来ません。唯物弁証法は学問的には不十分なもので、すべて政治的にマルクス主義は最後は処理しています。この方面のことは只今のお話をはずれますので、これ以上上げませんが、そうした哲学的世界観を内在しませんのが普通の社会科学の分野でございましょう。仏教的世界観の立場から、即ち人間存在の根源的なところから、社会福祉をすすめます場合、一応は今日の社会の構造の不幸な仕組みを分析説明しますには、何と言ってもひろい意味での社会科学の分析説明の力にまたねばなりません。そして、今日の人間に不幸を持ち来らしているところに向かつては、それを指針として福祉の仕事が進められるべきでありましょう。自然科学は実は生きているはずの自然界を物質として対象的に分析して、そこに法則を見出し、逆にその法則を逆手にとって自然を利用して行くの

ですが、社会科学もまた生きた人間を社会的存在として対象的に見て、そこに社会の法則的なものを見ております。問題は、社会科学は現資本主義社会の内部の人間抑圧という不幸をもたらす欠陥の分析はいたしますし、これによって物質的、制度的に欠陥を除去していくということで、社会福祉のためには十分役立っておるわけではありませんが、この人間なるもの、という実に複雑怪奇な存在は単に対象的に科学的にとらえられるものではありません。主体的に自身を見つめますれば、そこに人間自身ではどうにもならぬ地獄の世界を相応しております。この人間存在の根本に真に焦点をあてて見るとき、何と言っても仏教的世界観の上に立っての社会福祉というものの活動が絶対に大切なものと言わざるを得ません。皆さまのお力によって、現在の福祉なるものの内容が再検討されまして、本当の人間の福祉とは何かと問い直して、人間の真の仕合わせに向って皆様の御努力をご期待申上げる次第でございます。